

岸輝雄TIA－nano運営最高会議議長が語る「TIAと将来のつくば～つくばへの期待～」

12月16日に東京で開催された第4回つくばイノベーションアリーナ(TIA-nano)公開シンポジウムにおいて、岸運営最高会議議長がTIA-nanoの今後の進むべき方向について熱く語られました。以下はその要約です。

■TIA－nanoの現状

TIA-nanoは、つくばを中心とする産学官連携のオープンイノベーション拠点である。民間からも800人以上の研究者等が集り、エレクトロニクスを中心に産業競争力強化に努めています。この分野での論文引用においては世界一となっています。

政府から頂く研究開発助成金は、東京地区のRU11¹大学の約1250億円、関西地区のRU11の1040億円よりも多い1450億円となっています。その一方で、論文の誌上発表件数は東京地区のRU11の約20000件、関西地区のRU11の15000件に対し、10000件（産総研4,500、筑波大学3,000、NIMS、KEK各1,300）と少ないのが現状です。研究開発の主な目的が論文発表と実用化という違いがあるとはいえ、一つの成果指標です。

■つくば、TIA－nanoの問題点

つくばの問題の一つに「つくば」の知名度が低いことが挙げられます。また、国立研究所の知名度が低く、存在感が薄いと言わざるを得ません。つくばが工業都市でないこともあり、商品やサービスから「つくば」が見えないこともあります。

結果として、若い人が集まるところ、国内外の大臣や政治家や企業のトップが足繁く訪問するところにはなっておりません。

イノベーションには異質との出会いが必要ですが、そのための環境が整っていません。例えば、外国人にとっても子供の教育面の問題など長期研究できる環境ではありません。

■つくばへの期待

企業は連携して大きなイノベーションを実現することを期待していますが、つくばの各機関はばらばらにプロジェクトを推進しています。

つくばの連携強化と発信力の強化が求められています。

つくばに対する役割期待はイノベーションです。そのためには連携の場、連携の意識づくりが必要とされています。

政府の関心は2000年以降大学の改革に集中し、つくばに対する関心が薄まっています。科学技術基本計画における位置づけを見ても明らかで、中央政府、特に総合科学技術会議の積極的関与が必要と思われます。

¹RU11とは、研究及びこれを通じた高度な人材の育成に重点を置き、世界で激しい学術の競争を続けてきている大学（Research University）による国立私立の設置形態を超えたコンソーシアムです。

■2014年度の課題

2014 年度の課題は「つくばの連携システムの構築」です。

つくばの独立法人、研究者はつくばのもつ利点を有利に活用して自ら、連携プロジェクトの立ち上げと推進に集中し、人材交流に取り組まなければなりません。

また、各機関長、理事、プロジェクトの担当者等は、それぞれのレベルで TIA の発信力強化、ブランド力の強化に取り組んでいただきたい。